

20250511 復活節第2 主日礼拝

司式: 佃 雅之
奏楽: 中井喜久子

前奏: 「いざ喜べ、キリストのともがらよ」(M. ヴェックマン)

招詞: 眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。(エフェ5:14)

讚美歌 20 主に向かってよろこび歌おう

交読詩編 95

- 01 主に向かって喜び歌おう。救いの岩に向かって喜びの叫びをあげよう。
- 02 御前に進み、感謝をささげ/楽の音に合わせて喜びの叫びをあげよう。
- 03 主は大いなる神/すべての神を超えて大いなる王。
- 04 深い地の底も御手の内にあり/山々の頂も主のもの。0 海も主のもの、それを造られたのは主。陸もまた、御手によって形づくられた。
- 06 わたしたちを造られた方/主の御前にひざまずこう。共にひれ伏し、伏し拝もう。
- 07 主はわたしたちの神、わたしたちは主の民/主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。
- 08 「あの日、荒れ野のメリバやマサでしたように/心を頑にしてはならない。
- 09 あのとき、あなたたちの先祖はわたしを試みた。わたしの業を見ながら、なおわたしを試した。
- 10 四十年の間、わたしはその世代をいとい/心の迷う民と呼んだ。彼らはわたしの道を知ろうとしなかった。
- 11 わたしは怒り/彼らをわたしの憩いの地に入れないと誓った。」

列王記上 19:1-18

◆ホレブに向かったエリヤ

- 01 アハブは、エリヤの行ったすべての事、預言者を剣で皆殺しにした次第をすべてイゼベルに告げた。
- 02 イゼベルは、エリヤに使者を送ってこう言させた。「わたしが明日のこの時刻までに、あなたの命をあの預言者たちの一人の命のようにしていなければ、神々が幾重にもわたしを罰してくださいるように。」
- 03 それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シェバに来て、自分の従者をそこに残し、
- 04 彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」
- 05 彼はえにしだの木の下で横になって眠ってしまった。御使いが彼に触れて言った。「起きて食べよ。」
- 06 見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入った瓶があったので、エリヤはそのパン菓子を食べ、水を飲んで、また横になった。
- 07 主の御使いはもう一度戻って来てエリヤに触れ、「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ」と言った。
- 08 エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。
- 09 エリヤはそこにあった洞穴に入り、夜を過ごした。見よ、そのとき、主の言葉があった。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」

10 エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」

11 主は、「そこを出て、山の中で私の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。

12 地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。

13 それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」

14 エリヤは答えた。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」

15 主はエリヤに言われた。「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたなら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王とせよ。

16 ニムシの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とせよ。またアベル・メホラのシャファトの子エリシャにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ。

17 ハザエルの剣を逃れた者をイエフが殺し、イエフの剣を逃れた者をエリシャが殺すであろう。

18 しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、パアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」

ルカによる福音書 11:1-4

◆祈るときには

- 01 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。
- 02 そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。』」
- 03 わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。
- 04 わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を、皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遣わせないでください。』」

祈祷

天地の創造主にして全能なる活ける真の神。あなたの聖名を褒め称えます。主なる神、あなたはこの朝、私達一人ひとりの名を呼び、主キリストの体である教会に、またライブ配信によって礼拝へと招いてくださいました。あなたの限りない恵みを心から感謝致します。主よ、どうぞ今、私達が心も身体もすべて、あなたに明け渡し、あなたに選び出された者として相応しく、あなたを賛美し、あなたが告げ知らせてくださる福音に集中して、真の歓びに、真の愛に、真の救いに触れることができるようにしてください。

あなたはこの過ぎた1週間を、あらゆる良いもので私達を養い、導き、

祝福してくださいました。しかし、私達は、あなたがキリストの十字架と復活によって与えてくださった恵みに応えて生きることに乏しい者でした。祈ること少なく、自分自身の愚かさ気づきつつも、その愚かさから抜け出すことができず、語ってはいけない言葉を語り、自分の正しさにすがり、人を審き、あなたを遠ざける日々を過ごして参りました。私達の主よ、今、私達の愚かさをあなたが打ち砕いてくださり、私達が人間的な、この世的な愚かさによって、あなたから取り除かれることがないように、御言葉をお語りください。そして、まったく新しい者へと造り変えてください。今日、あなたを礼拝することを赦された私達が、十字架を仰ぎ、復活を信じて、信仰を堅くすることができるようにしてください。信仰によって、人間に従うのではなく、神に従うことができる者にしてください。

愛に満ちたもう主よ、世界の全ての所に自由と平和をもたらしてください。世界では武力によって自分の主義主張を押し通そうとする者があり、大切な命が奪われ続けています。また、新たな戦端が開かれ、私達の願いに反して争いが拡大しています。神様、私達がこの世界にあって、なお生きる望みを獲得することができますように。そのために、この地上にあなたが立ててくださったキリストの教会が思いを一つに、心を一つにして、あなたの義と恵みを証しし、平和を実現する群れとなることができるようにしてください。

慰めの主なる神、今日、この場の礼拝を共にできない兄弟姉妹のことを覚えて祈ります。私達の教会には、高齢のため、病のため、また、様々な事情によって礼拝に集うことのできない者達があります。主よ、どうか、この教会に連なる全ての者に、あなたが聖霊によって臨み、その一人ひとりに、励ましと慰めを豊かに与えてください。私達がこの礼拝でいただく恵みを、今日ここに集うことのできない私達の愛する友達に届けてくださいますようお願い致します。

神様、今日の説教者を感謝致します。笠原義久牧師が聖霊の導きを豊かに受けて、あなたの御言葉の説き明かしが為されますように。聴く私達にも聖霊を与え、説教によってあなたの教えが真実であることを味わい知ることができますように、あなたの助けを求めます。

今、あなたに栄光を帰する最高の時としてこの礼拝を聖め、受け入れてください。これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 330「神の霊が」

講壇「今日も生かしてください」 笠原義久

今日与えられた聖書の箇所、ルカによる福音書11章、その冒頭に、「弟子の一人がイエスに、『主よ、わたしたちにも祈りを教えてください』とお願した。』と、そのようにあります。私達にとって「祈り」とは何であるのか。

祈る時、私達は多くの場合、項垂れるように下を向きます。その時私達は、自分が経験してきたこと、またそこから自ら導き出した人生に対する考え方、人生観や或る意味での哲学、といったようなものを、その

ような自ら導き出したものを絶対のものとは思わず、自分を超越するものがあるということ、項垂れるように下を向くということは、このそういうことを意味しているのではないのでしょうか。

祈るとき、また私達は多くの場合、目を瞑ります。つまり、自分が見てきたものだけに視線を注ぐのを止めて、見えないものに目を注いでいるのです。私達はまた祈るとき、手を組み合わせます。そこでは自分の力による業というものに終止符が打たれている、そのように思います。

祈りというのは、端的に言うならば、私達の自己主張が止み、私達が自ら獲得したと思っている結論が沈黙し、私達の自我が膝を折って虚しくなることではないのでしょうか。自分が今まで見ていなかったものに向かって目を向け、今まで聞いていなかった言葉に対して耳を開き、今まで受け入れていなかった真実に対して心を開くということです。

しかし、今申し上げたようなことは、ありきたりのことは思われません。イエスの弟子たちが「祈りを教えてください」と、そのように願ったこと、それは言うまでもなく、祈りの言葉使いなどのことを問うているではありません。そうではなくて、強いて言うならば、“人は人生や世界というものをどのように見、どのようにそれに対して行ったらよいか教えてください”ということではないのでしょうか。「祈りを教えてください」、この願いはまさに全ての人に関わる人間存在の深みから発した、そういう願いであると言えるのではないのでしょうか。この私達の存在の深みからの問いに答えて「祈りを教えてください」というその問いに答えてイエスは弟子たちに祈ることを教えられたのが今日の箇所です。

このルカ福音書の箇所と並行するマタイ福音書では、「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。(6:8)」という約束に満ちた言葉と分ち難く結びついた仕方、この約束にいわば導かれて教えられたと、そのようにマタイ福音書の方ではなっています。

ルカ福音書では順序こそ、後先になりますけれども、祈りの言葉が教えられた後で、真夜中にパンを求めて扉をたたき友人の諭えが語られ、結論として、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる(ルカ11:9)」という、そういう約束に圧倒的な力をもって雪崩れ込んでいくのです。

つまりマタイもルカも、天の父が私達の祈りを聞いてくださるという確信が柱になっているということに変わりはありません。“私達には天の父がある。そして、父は私達の祈りを聞いてくださる。だから、私達は祈ることができる。私達はこの世で決して一人なのではない。”聖書はそのように私達に語っているのです。つまり、“私達が自らの何らかの経験から引き出した結論、それが全てではない。私達の物の見方が全部ではない。そうではなくて、私達の父である神が全ての物事を見ておられ、そしてその見方は、私達のものよりもはるかに深く、高く、広く、そして長い”、そのように語っているのではないのでしょうか。

先程お読み頂いたイスラエルの預言者エリヤの記事。彼は、自分が正しいと信じる事のために全身全霊を挙げて戦った預言者でした。そのあげく、刀折れ、矢尽きたような有様で、自分が今やまったく独りぼっち

になってしまったことを嘆き、「主よ、もう充分です。わたしの命を取ってください。(4a)」と祈りました。しかし、そのような彼に対して与えられた神の答えは、“**バアルにひざをかかめぬ7000人を残しておいた**”ということでした。彼は一人ではなく、彼と共に戦う者が7000人もいるというのです。エリヤが、1の可能性しか見られないそういう状況の中で、神は実に7000倍の可能性というものを見ておられるのです。

聖書には実にこのような記事が充満しています。聖書によると、人間の歴史というのは、人間の見方が、高ぶりであれ、絶望であれ、神の言葉によって繰り返しひっくり返されてきたそういう歴史です。私達一人ではない、私達の考えや結論がすべてではないのです。天の父がおられるというのです。ですから、“父よ!”とそのように呼びかけることが私達には許されています。そのように神に向かって膝を屈め、心を開くことが祈りであり、このように呼びかけることができれば、後はたとえまい言葉が口から出て来なくても、それはすでに真実な祈りであると言えるのではないのでしょうか。

こう考えてくると、イエスが「**祈るときには、こう言いなさい。**」と、そのように仰ったとき、それは命令とか指示とか言うより、むしろ豊かな招きであると、そのように言えるのではないのでしょうか。それは、喜びへの招待、あらゆる人知を超える神の平和の世界への招待の言葉なのではないのでしょうか。ですから私達は、その神に対して“父よ”と祈ってよいのです。そのことによって、自分の狭い心、頑なな思いを軸にして回転していた貧しい世界が、今や開けるのです。大きな可能性に向かって開けるのです。

さて、このイエスの教えられた祈りは、次に二つの祈願へと移っていきます。「**御名が崇められますように。御国が来ますように。**」、言葉の点で言うならば、「御名」とか「御国」とか、「御」という字がつけられておりますけれども、ここは元のギリシャ語の原典に忠実に、〈**Ονομά σου**〉[あなたの名]、〈**Βασιλεία σου**〉[あなたの王国]、と明瞭に訳すべきだと、そのように思います。肝心なことは、神の国、すなわち“**神のご支配に対して真つすぐにこの目が向けられている**”ということだと思えます。“**私の意志が、私の欲や願望が満たされるように**”というのではない。私ではなく、“**あなたの名が崇められ、あなたのご支配が実現するように**”というのが『**主の祈り**』の前半部分の核心であります。いかなる意味においても、“**私の思い通りになりますように**”ということではありません。

私達は、パウロも言っているように、部分的な存在にしか過ぎません。全く断片的な存在であって、完全なものがきた時には廢れるほかない、そういう者達です。そのような私達が完全な存在である「あなた」というものを持つということ。その「あなた」に対して心を開く、そのことが許されているということ、これは本当になんと感謝に満ちた出来事ではないのでしょうか。そして、そのことが、隣人に対しても心を開かせてくれます。

「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負目のある人を、皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わ

せないでください。」

ここでも自分だけという狭く硬い枠が打ち破られ、自分と一緒に生きている他の人たちが一緒に生きてゆく生活へと、扉は広く開かれています。『**祈り**』の前半の中心が、“**あなたに向かって心を開く**”ということであるとすれば、『**主の祈り**』の後半では、一人称複数の私達、その私達が、“**共に生きてゆくべき他者に向かって心を開く**”ということが前面に出てきています。しかもそれは何か深遠な理論としてではありません。私達が日ごとにもっとも身近な問題として体験している事柄、つまり、食べ物だとか、お金の問題だとか、そういった具体的な生活の場で私達として共に生きて行くという、そういう問題に関わっています。イエスの仰ることはいつもそうなのですけれども、こういった卑近で具体的な問題が実に神のご支配から除外されず、むしろその中へと取り込まれていきます。人間の体、そこで営まれるもろもろの生活、それは決して卑しい避けるべき話題ではありません。まさにその中で神の意思が行われ、その支配が実現する筈の場なのであり、そして神のご支配というのは、自分一人で自分の利益を追求するのではなく、自分と他者とが共に私達として生きて行くという、そのことに他ならないのです。

自分が他者と共に私達として生きて行くという、そういう生活がここでは祈り求められています。しかも新たに、日ごとに祈り求められている。十年分の保証を一度にということではなくて、“**今日一日、他者と共に食べて生きられますように、赦し合って共に生きられますように**”ということなのです。こういうことは、一日一日新たに祈るべきことです。吸う息ごとと吐く息ごとに新しく祈らねばなりません。こういう生き方は、よく言われるような、行き当たりばったりであるとか、悪い意味で無計画であるとか、そういうものでは決してないと思います。ただ、その上でやはり私達は自分の命が自分の思い通りになるものではない、そのことを神への畏敬の念をもって認めなければなりません。

今日、私がこの礼拝を終え教会を後にして家に帰るということが既に当たり前のことではないのです。それはただひたすら神の恩恵なのです。一瞬一瞬、一日一日、私達はただ神の赦しによって命を与えられているのです。ですから、ヤコブの手紙の著者が言うように、

4:14 **あなたがたには自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧にすぎません。** 4:15 **むしろ、あなたがたは、「主の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう」と言うべきです。**

本当に、私達は神の恵みによって一日一日生きることを赦されています。これは私達の当然の権利ではありません。そうではなくて、驚くべき賜物、驚くべき赦しなのです。ですから、私達は日ごとに“**今日も生かしてください**”と祈るべきです。そしてその生活を人々と共に分かち合うべきです。

このように一日一日私達に生きることを赦し、私達の罪を赦す方として、父なる神が仰がれる時、マタイ福音書の『**主の祈り**』の最後の言葉が輝きを放つことでしょう。

6:14 もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。6:15 しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」

これは決して条件ではありません。神の赦しによって一日一日生きている私達が、他者を赦さないという、そのことは全く調和しないのです。そして、この調和を欠くとき、それは私達にとって本当に致命的なこととなる、そういう警鐘の言葉として、私達は、このマタイ福音書の『主の祈り』の最後の言葉を聞かなければならないと思います。

最後に、私達の教会が、今からおよそ40年前に発刊した『祈りへの勧め』という小冊子に記されている勧めの言葉に聞きたいと思います。これは、当時の主任牧師であった池田伯先生が起草されたものと記されています。このようにあります。

祈りは、私たちに対する父である神の憐れみと恵みによって生み出されます。したがって、私たちの祈りは、生ける救い主イエス・キリストの御霊による執り成しによって、祈りになることができます。「主イエス・キリストのみ名によって」祈るのはそのためです。ですから、私たちの祈りが、たとえどのように欠けが多く、誤りにみちていようと、これも真の祈りとして神の御前にもたらしてくださるのは、このイエス・キリストの執り成しです。このキリストのいさおしのゆえに、神は私たちの祈りに応え、「助けて」くださるのです。キリストの執り成しがなければ、だれも聖なる神のみ前に立つことはできません。それは、使徒言行録4章に記されているように、「この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、ひとえに、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。この人による以外に救いはないのです。(使4:10,12)」

お祈りしましょう。

主なる御神様、この時の中で私達を治め、動かし、満たしているものは、あなたの真実な御言葉であること、御言葉が私達すべてを慰め、勇気づけ、励まして下さることをどうか信じさせてください。私達はあなたに希望を抱きます。私達はあなたに信頼を献げます。あなたが御子キリストによっておはじめになった御業を必ず終わりまで全うされることを信じ祈ります。主キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 493「いつくしみ深い」

献金・感謝・主の祈り(大川佐知子)

天の神様、こうして私達一人ひとり、新しい一日を与えられ、ここに集められ、あなたを礼拝する時が持てましたことを感謝致します。また、ライブ配信を通して祈りを共に合わせている一人ひとりがいることも感謝致します。

今日は、笠原先生を通して、私達一人ひとりが神様に招かれ、そして、祈る『主の祈り』が与えられましたことを教えていただきました。私達は、神に祈るときに心からへりくだり、そして神様から与えられた大きな恵みを感じながら一日一日を感謝しながら過ごして、また他者と共に生かされていることを覚え、大きな本当にあなたの愛を感じながら日々

歩ませていただいています。心より感謝致します。

私達一人ひとり小さなものですが、どうかあなたの御用のための働きを夫々与えてください。私達は、あなたから日々過ごすための恵みを頂いています。その一部を教会の御用のために献金致します。

どうか感謝してあなたから与えられた『主の祈り』を祈ります。…『主の祈り』アーメン。

派遣: 讃美歌 90「主よ、来たり、祝したまえ」

祝福: 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の清き親しき交わりが、とこしなえにあるように、アーメン。

報告: 真柳和俊さん(聖和会)1943年5月11日生、5月5日(月)逝去。

後奏: 「天使の証人」(H. プエルトリウス)